

化成肥料を作らない農業国・スーダン～「アラブのパンかご」の現実

古くから「アラブのパンかご」と呼ばれてきた国、スーダン。農業生産のポテンシャルの高い国、と言われ続けてきた国。そこは、化成肥料を作らない国でもあった。

スーダンについては、AAINewsでも何回か触れているが、今回3週間ほど訪問する機会があった。スーダンは、南スーダンが分離独立した現在でも、国土面積 188 万



灌漑を待つタマネギ畑

km²(日本の約5倍)はアフリカで3番目に大きい国である。南スーダン独立後は、石油収入が大きく減少し、農業がますます重要になってきている。可耕地は約8,400万haとされているが、このうち定期的に耕作されているのは1,000～1,400万ha程度であり、その多くが天水農業で、灌漑農地は200万ha程度である。天水農業は降水量や降水パターンの影響を受けるために、生産が不安定で収穫面積や収量の年変動が大きい。スーダンにおいても、農業生産の中で灌漑農業の役割は重要であり、実際に灌漑農地は総耕作面積のわずか5%程度でありながら、全穀物生産量の1/3を生産している。

一方で、灌漑栽培しているにもかかわらず、作物収量が低いことがスーダン農業の大きな課題である。たとえば、コムギと綿花についてその収量を隣国エジプトと比較してみると、明らかな差があり、スーダンではまだまだ生産性向上の伸びしろが大きいことがわかる。

灌漑によるコムギと綿花の収量比較(kg/ha)

作物	スーダン	エジプト	比率
コムギ	1,736	6,350	27.3%
綿花	1,211	2,847	42.5%

出典: FAOSAT (2009年～2013年の平均値)

この低収量の主な原因は、燃料・肥料・種子・農薬等の農業資材の価格が高いためである。それが化成肥料等の低投入につながり、ひいては低収量を引き起こすという悪循環に陥っているものと考えられる。スー

ダンは農業国であるが、化成肥料を生産する工場はなく、すべて輸入に頼っている。近年の肥料価格の高騰もあって、ますます農民には手の届きにくいものとなっている。

また資材の投入だけでなく、灌漑農業の改善という点からもポテンシャルがある。スーダンの灌漑は大きく分けて、国営、州政府、民間企業及び農民の管理による。水路のライニングは全くされておらず、圃場における灌漑方法もほとんどが水盤灌漑であり、まだ節水の必要性には迫られていない、あるいは農民に節水の意識があまりないように思われる。これは現時点では水は十分にあるということだが、水源の多くをナイル川という限られた水源に依存しているため、今後食糧生産を増加させるために、灌漑面積を拡大していく上では、より効率的な水利用を行うことが必要になってくる。



重機による灌漑水路のメンテナンス



三次水路と圃場の様子

ところで、スーダンは湾岸産油国や中国等の諸国から農地への投資を受け入れて、そこで生産された農産物を契約国へ輸出している。国家としては、農地と水を貸して見返りを得ているわけだが、一方でスーダンは大量の食糧援助を受けたり、コムギの輸入をしている。スーダンがこうしたゆがんだ形の「パンかご」ではなく、真の意味での「パンかご」になることを願っている。

(2014年11月、湖東)



街中でよく見かける飲料水用の素焼きポット



ナイル川を渡るフェリー